

研究課題 (テーマ)	EWI を補完療法として活用したがんサバイバーへの看護支援プログラムの開発		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学部	助教	福村 寛子
分担者	看護学部	教授	片田 裕子
研究結果の概要			
<p>日本人のがん罹患率はおよそ 2 人に 1 人と言われ、がん医療の進歩によって長期に生存しているがんサバイバーが増加している。がんサバイバーの増加はニーズの多様化と複雑さを招き、相談対応の困難なケースが増えていることが報告され、支援体制の拡充や支援者の資質の向上が施策に盛り込まれている。</p> <p>そこで、本研究は新たながんサバイバーの支援方法として Expressive Writing Intervention (以下 EWI とする) を補完療法として活用した看護支援プログラムの開発を目的とした。</p> <p>本研究は van Maijell ら (2004) による「根拠に基づく看護介入を開発するモデル」に準じた方法で実施した。</p> <p>第 1 段階として医中誌 Web、CiNii、J-STAGE を用い、「がんサバイバー」「がんサバイバーシップケア」に関する研究 116 件を分析対象とし、がんサバイバーの抱える問題とニーズを分析した。がんサバイバーの抱える問題は年齢、がん種、がんサバイバーの時期により異なり、また、医療者の介入が希薄になる時期に支援のニーズがあることが示唆された。さらに、EWI および書くことを介入に用いた研究から既存の実践の内容を分析した。国内文献は医中誌 Web、CiNii、J-STAGE を用い 56 件、海外文献は PubMed を用い 89 件抽出し、介入の効果はどれだけ持続するのか、どの時期に介入することが効果的なのか、時期によって効果的な介入方法に違いがあるのか検討した。</p> <p>第 2 段階として、第 1 段階で分析したがんサバイバーが抱える問題およびニーズと、既存の実践内容を構造化したものを統合し、現在看護介入モデルを試作中である。</p>			
今後の展開			
<p>今後は試作した看護介入モデルの妥当性の検討のためパイロットテストとしてケーススタディを行う。さらに、介入に対する対象者の体験、介入の結果、どのような効果が体験されているかあるいは観察されているか、看護者は介入を実行する可能性をどのように判断しているかについて質的研究により評価していく。</p>			